

トラフグ中間育成時の初期減耗原因について

沢田 健蔵・池脇 義弘

目 的

徳島県でのトラフグ中間育成成績は芳しくなく平成2年度では生残率が0.5~41%（平均26%）とあまり良くない結果である。このため、この減耗原因について、魚病の面から検討した。

材料および方法

平成3年6月10日、日本栽培協会屋島事業場より輸送された中間育成用トラフグ稚魚600尾（平均体長2.7cm、平均体重0.7g）を水産試験場内の小型水槽（0.5×1.0×0.5m）に収容し、配合飼料を1日2~3回給餌して飼育した。死亡魚が見られた場合にも投薬は行わず、毎日2回死亡魚を取りあげ、症状および顕鏡により滑走細菌の存在の有無を観察し、2%NaCl加BHI寒天培地あるいはTS寒天培地を用いて細菌検査を行い、死亡原因を調べた。

飼育は6月29日まで20日間行った。飼育期間中の水温は22.0~20.9平均21.5であった。

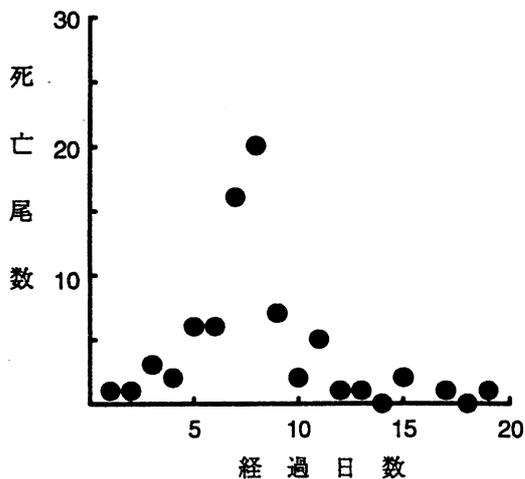


図1 実験飼育における死亡状況

結果及び考察

飼育期間中の死亡状況を図1に示した。死亡尾数は5日目から増加し、8日目に死亡数は最大となったが、12日目にはすみやかに減少した。6月29日までの20日間に合計75尾の死亡が確認され、生残

率は 87.5%であった。

死亡魚に見られた症状を表 1 に示した。ほとんどの死亡魚は尾鰭の一部あるいは全部の欠損と尾柄部に潰瘍がみられた。細菌の観察・分離状況を表 2 に示した。これらの症状のある病魚からは滑走細菌が高率（91%）に観察された。V. anguillarum は検査魚の 33%から分離されたが、滑走細菌に比べその分離率は低かった。分離された V. anguillarum は全て C Type であった。

実際の中間育成場での病害の発生は今回の実験と同様な傾向を示し、収容してから 10 日以内にピブリオ病、滑走細菌症が発生した。

以上の結果から、平成 3 年度におけるトラフグ中間育成での主な病害は滑走細菌とピブリオ病の混合感染であったといえる。これらの疾病は収容後 10 日迄の間に発生がみられたことから、中間育成初期の飼育管理が重要になると考えられる。

平成 3 年度の中間育成の生残率は 39～88%になり例年に比べ良好な結果であった。また、飼育実験においても、これら疾病が自然に終息し、大きな被害とならなかったことから例年と違った病害の発生状況であった可能性もあり今後の検討が必要である。

表 1 死亡魚の症状

症状	件数	(%)
症状なしあるいは事故による死亡	9	(12.0)
カリグスの寄生	1	(1.3)
尾鰭欠損	7	(9.3)
尾鰭欠損、カリグス寄生	1	(1.3)
尾鰭欠損、尾柄潰瘍	56	(74.7)
体表潰瘍	1	(1.3)

表 2 細菌の観察・分離状況

細菌の観察・分離	件数 (%)	
滑走細菌の存在	+	58 (90.6)
	-	6 (9.4)
V.anguirallum の分離	+	17 (32.7)
	-	35 (67.3)

参考文献

1) 池脇義弘・沢田健蔵・湯浅明彦・和泉安洋・森 啓介 (1993): 放流用種苗中間育成時の病害発生について、平成 3 年度徳島水試事報 . 286-288